『医心方』第二巻 鍼灸篇 孔穴主治法第一に引用された古典について

高島文一

緒言

『医心方』は九八四年丹波康頼により撰述されたが、その第二巻鍼灸篇孔穴主治法第一には、六六〇穴が記載されており、その中の六四九穴は『黄帝内経明堂経』より、その他の十一穴は、『華佗鍼灸経』から中矩一穴、膝目二穴、『小品方』から曲沢二穴、『千金方』から膏肓二穴、風市二穴等が引用されているとされている。

晋の皇甫謐の『甲乙経』の序文に、『明堂孔穴鍼灸知要』という書名が見えるが、これは亡失しているが、揚上善撰の『黄帝内経明堂』は、この流れを汲むものと思われ、主として、ここから引用されたと思われる。しかし実際の記載がどのようになされているかを、他書と比較することにより、認識を深めようとした。

一 方法

他書として『医心方』以前の『霊枢』『甲乙経』『千金要方』『千金翼方』及び以後の『銅人腧穴鍼灸図経』を選び、症状として、現代の高血圧症に相当する十二症状 一頭痛 二眩暈 三鼽衄 四耳鳴 五口顔過斜 六心煩 七心痛 八半身不随 九頸肩痛 一〇面赤 一一胸痺 一二痺 を選び『医心方』と対照比較した。

二 結果

㈠ 『霊枢』と『医心方』。『霊枢』には経穴の記載が少なく比較の対照とはならないが、『医心方』では頭痛、眩暈、肩頸痛の記載が多かった。

㈡ 『甲乙経』と『医心方』。『甲乙経』は『明堂孔穴鍼灸知要』から引用しているので、殆んど一致している。ただ、耳鳴、心煩においては『甲乙経』の記載が多い。

㈢ 『千金要方』と『医心方』。殆んど一致している。ただ心煩、心痛、面赤では『千金要方』の記載が多い。

㈣ 『千金翼方』と『医心方』。殆んど一致しない。特に頭痛、眩暈、頸肩痛の記載が『千金翼方』では著しく少ない。反面、心煩、心痛、半身不随では、『千金翼方』の方が

記載が多い。これは、引用書が異なるのかあるいは『千金翼方』には新たな臨床的観察が加わったのかいずれかと思われる。

㈤ 『銅人腧穴鍼灸図経』と『医心方』。「銅人腧穴鍼灸図経」は宋の時代に王維一により経絡経穴を整備してつくられたもので、『医心方』以後のものである。これもよく一致している。ただ、耳鳴、心煩、心痛の記載が多くなってきている。

三　考　察

『医心方』の孔穴は殆んど『黄帝内経明堂経』からの引用で、古代から唐迄の孔穴を記載しているものと考えられる。同じく古代からの『明堂孔穴鍼灸知要』から引用したとされる『甲乙経』とよく一致することは当然である。又、六世紀の孫思貌の『千金要方』ともよく一致する。丹波康頼が、『甲乙経』『千金要方』から引用したことも考えられることである。ただ『千金翼方』については全く異る。丹波康頼が『千金翼方』を見なかったのか、あるいは『千金翼方』が別のルートから引用したか、独得の観察結果を括めたものか疑問である。

十一世紀の『銅人腧穴鍼灸図経』は整備されたものであるが、『医心方』ともよく一致する。一部記載の増加したものもある。

結　語

『医心方』は丹波康頼により、日本式に実用的に中国文献から引用されたとされているが、孔穴に関する限り、殆んど揚上善の『黄帝内経明堂経』から引用されており、孔穴の配列は経絡にこだわらず、頭部、面部、肩部、手部、背部、胸部、腹部、足部に分けて主治症を述べている。『甲乙経』『千金要方』とも殆んど一致する。宋代の『銅人腧穴鍼灸図経』とも殆んど一致する。これは現代においても大差ないものと思われる。『千金翼方』に関しては、『千金要方』の続編ということで、少し趣が違っている。

（京都市）